

ニンポートングトウ
寧波滕頭実践例館
上海万博より

よこやま ひろこ
横山 廣子 民博 民族社会研究部

寧波滕頭実践例館の外観



二〇一〇年一月三十一日、一八四日間の上海万博が、のべ入場者数約七三〇〇万人を記録して閉幕した。わたしが訪れた八月末は連日約五〇万人の人出で、当初の計画とまち時間とを秤(はかり)にかけながら見学した。その結果、雲南ウィークの各種催し、日本館など一〇館ほどの国家館、中国省市区連合館内の十数館、大阪を含む、ベストシティ実践区内の世界各都市の展示館を見ることがになった。

農村を展示した唯一の館

特に印象に残ったのは、寧波滕頭実践例館。都市単位で生活の質向上のための実践プランを展示するベストシティ実践区で唯一、中国浙江省寧波市にある滕頭という人口約八三〇人の村に焦点を当てていた。

典型的な江南の農家をおもわせる二階建ての展示館は、外壁に一〇〇年以上前のもも含まれる古い瓦(かわら)やレンガが使われていた。関係者が半年かけて村の周辺各地で集めたという。そこにも感じられる歴史、自然、人間が結合して生まれる妙味が、館内の随所で感じられた。

五感に働きかける展示

入館者はまず、二階へとスロープを上っていく。途中、コーナーごとに鳥や虫の声、風の音など自然のいろいろな音が聞こえてくる。それらは二十四節気を象徴しているとのこと。

階上のオープンスペースには水田があつて、緑の稲穂が心を和ませる。七〇〇〇年前の稲の栽培が確認された河姆渡遺跡も寧波市にある。五分ごとに霧が噴き出し、虹が見え、係員が放った蝶が稲穂のあいだを舞う。

一階にある映像ルーム前では、観客は靴にカバーをつけさせられる。入室すると、床に横になることを勧められる。天井が大画面と化すその



透明の河姆渡遺跡解説パネル越しに広がる、豊かな水と緑の空間

とき、突然、床が波立つように上下し、次に部分的にせり上がり、マットサージチェアのように揺れ動いた。この床下に設置された気圧装置のおかげで、村の景観を見ながら心地よいひとときが過ぎていった。

「より良い都市、より良い生活」の上海万博のなかで

八〇年代以降、発展を重ねた滕頭村は、二階のこじんまりした室内で紹介されていた。パネルのサイズ、解説の長さ、文字の読みやすさ、写真と文字のバランス、何気ないようで、すべてがほどよく、最後は、エコと人びとの和を大切にす滕頭村が世界に向けた宣言で締めくくられる。わたしには非常に興味深い展示だった。しかし、一緒に入館した中国人たちは素通りするばかり。

その姿に、わたしは今回の万博のテーマ「より良い都市、より良い生活」を思い出した。そこに、ホームページさえも備える滕頭村の頑張りがあつても、全体としては圧倒的に都市に対して向けられている現在の中国社会の視線を感じてしまっているのである。